

無料配布 12月10日(日) 第2号

NEWS 岐阜

明後日新聞社

岐阜県美術館アートコミュニケーション「ながら」

www.asatte.jp

発行元: 明後日新聞社 岐阜支局 asatteshinbun.gifu@gmail.com 岐阜

〒500-8368 岐阜県岐阜市 宇佐4-1-22 岐阜県美術館

社主: 日比野克彦



### 明後日朝顔収穫祭特集

10月28日、秋晴れの下開催されました

明後日朝顔プロジェクトが岐阜県美術館・「ながら」の活動として展開されて今年で4年目、はじめて一般参加者さん(計14人)子ども7人・大人7人と一緒に野外、中庭の広場で開催しました。その様子をお伝えします。

収穫祭後半は、場所をアートコミュニティ「ターブルーム」(以下「ACルーム」)に移してのスタッフタイム。冒頭、日比野館長さんから「明後日朝顔プロジェクト」のお話をいただきました。そのイメージがさらに深まり広がりました。いよいよスタッフ開始です。それぞれが選んだ一番の種をじっくり観察、収穫のときに感じた想い、朝顔が育った今年の夏と自分の夏の記憶を重ねながら種のスリッパをしました。

その不思議を実感してもらいたいとして、「明後日朝顔全国マップ」を広げ、いろんな地域の種が岐阜に来て育ったことを指さし伝え、収穫祭がはじまりました。参加者さんは4つのチームに分かれ、チームごとに相談し一番育つであろう地域を選び、つるの長さ、実った種の数を想像し、いよいよ収穫です。建物の屋上まで届いたつるを絡ませたロープのまま外し、種取りエリアに運びました。実際にさわってつるをみると、つるは驚くほど太く強く、種は高まりました。

「明後日朝顔プロジェクト」は、アーティスト・岐阜県美術館館長の日比野克彦さんが2003年、新潟県十日町市高平(あざみひろ)で始めたプロジェクトです。朝顔を育てることで、地域のコミュニティを育み、収穫された種を通して人や参加地域をつなぎます。このプロジェクトは岐阜県美術館・「ながら」が参加し登録名「ながら」として活動しています。2023年・収穫祭のテーマは、「種のご縁を信じよう!」岐阜県美術館の明後日朝顔は「日本のあちこち、地域から届いた種が、岐阜の土、水、空気が、日差し、いろんな恵をもち育ち咲き種を結びました。一粒の小さな種から、つるは伸びて伸びたのかな、花は咲いたのかな種はいくつできたのかな そんな種のご縁を感じよう!そんな種がはぐももの、つなげるもののご縁を感じよう!」と決められました。



明後日朝顔収穫祭参加者のみなさん

少々戸惑っていた人もいつの間にか夢中になり、思いの色鉛筆が種を彩り心地よい音を奏でACルームを満ちました。描き終えたあと、スリッパに込めた想いを話し共有しました。発表するたびに大きな拍手が湧きみんなの想いが寄り添うようでした。「5年後、10年後、20年後にも朝顔は、なにもなくても咲き種は二ぼれ、また芽吹き伸び、咲いて種を育み続いていきます。あなたも大きくなるながら未来に向かって続きます。未来のいつか、今日のことを思い出してつるを伸ばしてくださいね」と日比野館長さんがまとめて収穫祭は終了しました。

そんなワイワイのなか、日比野館長さんが嬉しそうに登場され、「このやり方は間違っている!」「これじゃ種が二ぼれで転がる。混ざってしまう!」と一喝、参加者さんと運営スタッフ一同、「そうだっただ!」「種が主役、種のご縁、履歴が大事!」「混ぜたらダメ、二ぼれしちゃダメ」をあらためて実感、種が落ちても紛失しない、混ざらないように種を受けるシートを張り直し、大きく広げて事なきを得ました。

#### 日比野克彦館長インタビュー

日比野克彦館長と編集長加納

「今回の種取りは準備不足で種が混じりそうだったので30点!」との評価をいただきました。来年は100点を目指します! (撮影 白井 記者 高城)

### 優勝!! 「しろあさがおさん」チームのレポート

しろあさがおさんチームは、垂井町から参加の親子3人組。一番長い朝顔選びでは、「気仙沼!」と即答するものの、競合するチームがありジャンケンで負けちゃって「さいたま」を選択! 「さいたま」だって屋上まで蔓が伸びているし、元気よすぎで隣のロープにまでからまっている。と納得の選択。つるは乾燥しすぎていたのか、ロープを抜くときに何か所か切れてしまい少し残念。ちぎれたつるをそって並べ、計測。予想した長さより実際は少し短かったけれど、種の数は予想よりはるかに多くびっくりです。なんと197粒もありました。

スリッパはこの夏の思い出を話しながら楽しく進めました。お母さんは、この夏実際に種の中をのぞいた時の驚きを再現。お兄ちゃんも、収穫祭の前にあった「人生で一番うれしかったこと」を種のお船の中に乗せました。妹ちゃんは、学校であさがおの観察をしたばかりなので、種もじっくり観察、前から、後から、上から、下から全方向からの種を、用紙裏側まで使って一生懸命描きました。スリッパに込めた想いを、みんなの前で堂々と発表してくれて拍手喝采をもらってニコニコ顔でした。(記者 林)

チーム: しろ

選んだ地区: さいたま

長さの予想: 12. m 実測: 9.5m

種の数予想: 140 粒 実数: 197 粒

チーム: あか

選んだ地区: 鈴平

長さの予想: 8. m 実測: 9.0m

種の数予想: 150 粒 実数: 153 粒

チーム: むらさき

選んだ地区: 気仙沼

長さの予想: 10. m 実測: 9.25m

種の数予想: 106 粒 実数: 95 粒

チーム: あお

選んだ地区: ひめじ

長さの予想: 8.5m 実測: 8.5m

種の数予想: 60 粒 実数: 61 粒

地域の明後日朝顔活動レポート

豊後一夜城 (大垣市)

9月30日大垣市の豊後一夜城址公園にて、明後日朝顔の収穫祭が行われました。記者、林が加納が参加しました。その様子



豊後一夜城址公園での「明後日朝顔プロジェクト」の活動は豊後地域まちづくり協議会が中心となっており今年で3年となりました。この夏の猛暑のなか城の周りを緑豊かな景色に覆い、色鮮やかな花をつけ、その時々で訪れる人を驚かすまで育ててきた朝顔も、9月の末にはたくさんの実をつけエネルギーいっぱい種を抱え込んでいました。収穫祭当日、くはがラー先輩、遠くからの大垣さんをはじめ男性3名女性22名がにぎやかに集まってみなさんのウキウキが伝わってきました。朝顔は、大切に育てられた朝顔は、このことを証明するように太いワイルがネットにしっかりと絡みついていました。これを外すので大変な作業になりそうだと心配する記者の横では「今年は豊切っても良いんだよね、祭だわあ」と声が上がります。去年は種を取った豊切りをネットから外し、出来るだけ長く種を残す必要があり、一本一本丁寧にネットから外し、たいそう神経をつかったとのこと。今年も絡まった箇所はハサミで切っちゃえるからストレスがたまりませんが、笑いながら楽しく作業が進みました。今年で3回目の収穫祭は、



岐阜県福祉事業団・ひまわりの丘 (関市)

岐阜県福祉事業団「ひまわりの丘」さんの「明後日朝顔プロジェクト」への参加経緯は、2022年にオンライン開催された「第55回全国社会福祉事業団大会」で日比野克彦氏が「アートの社会的役割」と題し、特別講演で新潟県十日町市葛平にて明後日朝顔プロジェクトを紹介したことがきっかけでした。コロナ禍であり講演も配信となりましたが、職員の方が「明後日朝顔」にすっかり魅了され、事業団全体で取り組むことを決意し、運営する社会福祉施設にその素晴らしさを紹介したところ複数の施設が活動への参加、取り組みがスタートしました。

5月の苗植え式には、岐阜県美術館のスタッフとしても、くはがラーも参加させていただきました。4つの大きなプランターに8本の小さな苗を植え、10メートルはあろうかという屋上までロープを張りながら作業した姿が思い返されます。翌日から利用者さんと職員の方々が欠かさず水やりを励まされたおかげで、小さな苗はみるみる立派に成長し、夏の猛暑の日差しをエネルギーにぐんぐん伸びて屋上まで届いて、次から次へと多くの花を咲き誇らせています。それだけでも十分に楽しめたことと思いますが、10月の収穫時にはなんと290.59gの種を収穫されたとのこと、取付した二つが仰天してしまいました。持たせてもらったところ、ずっしりしりしり重く、小さくて大きな一粒一粒に未来が繋がるパワーが溢ち溢ちしているようでした。



取材は「ひまわりの丘」の3名さんと記者2名の男ばかりでなかなか始まりましたが、朝顔の持つパワーを語り合うなか、長年の友人のように打ち解け、全員が少年のようにニコニコ顔になったのが印象的でした。これも「明後日朝顔プロジェクト」が人々を繋ぐことだと実感しました。また、利用者さんはアート制作に取り組みだぶられ、個性的で素敵な作品がたくさん展示されています。次回、これらのアートに関する取材をさせていただきます(記者 鳥野)



とよみのよぶね

第18回

特集

開催日: 2023年12月22日(金) 点火時間: 16:00頃~20:00頃

開催場所: 鶴飼観覧船のりば付近~長良川右岸プロムナード一帯

「とよみのよぶね」ってナンヤローネ

「とよみのよぶね」は一種の祭りです。一年で夜が最も長い冬至の日で開催されます。その夜、長良川には1から12の数字と干支をかたどった巨大な行灯を掲げた船が浮かびます。行灯は和紙と竹で作られています。1から12までの数字は各月を意味しており、川面を行き交う1月、2月、3月の行灯...。そこに集う人たちは、この一年、過ぎた日々を思い返します。

「とよみのよぶね」は、アーティスト、日比野克彦氏の発案と行動により2006年にスタートしました。今年、18回目です。(日比野克彦氏は現在、岐阜県美術館館長、東京藝術大学学長)

1から12までの月行灯はそれぞれの団体が制作します。岐阜県美術館のアートコミュニケーター「くはがラー」は、今年の干支の卯(うさぎ)を作っています。

「明後日新聞社 岐阜支局」は、第2号・3号で「とよみのよぶね」月行灯、干支行灯の制作および12月22日の本番、来年1月14日、長良天神・左善長で干支の行灯が0に戻るまでを特集します。

12 中部学院大学での行灯制作

11月22日 中部学院大学の関キャンパスへ「とよみのよぶね」行灯制作の取材に行ってきました。人間福祉学科の水野先生とインクルーシブアート研究会の学生さん、教職員のみねさんがチームをつくり、12月毎の行灯制作に取り組んでおられました。水野先生の呼びかけで昨年からの行灯制作に参加しており、昨年の試行錯誤の経験を活かし、竹組みチームと和紙染めチームに分かれ並行して手際よく作業を進めておられました。和紙染めはバケツの水に絵具を溶かし量だ和紙を浸けて染めます。ねらった色合いになるよう絵具の量を調整しながら進められる様子が印象的でした。今年の「12」は雪と白鳥をモチーフにした素敵なおデザインです。作業が終わったあと、寒いなか屋外での作業は大変ですが、昨年の「とよみのよぶね」当日の感動が支えとなり今年も頑張っておられるようです。目を見張るほど美しい12月毎が完成し、長良川に浮かぶ船が楽しみです。(記者 鳥野)



1 虹色テラスでの行灯制作

11月23日午前 1月毎の行灯制作中の(株)桐山・虹色テラスを訪ねました。すでに竹組みは完了し和紙貼り真っ最中でした。行灯制作をするきっかけとなったのは、当時の「とよみのよぶね」制作リーダーさんから誘われてのことです。今年のテーマは『芽吹く』で、アターコロ十の最初の年で、始まりの年。新しい時代の芽吹きを表現しました。とのことでした。竹組みは、(株)桐山の須田さんを中心に歴代の制作リーダーさんたちとそのご家族が集まり制作されたそうです。この日は、同年代の女子3名で懐かしのキューンズの曲をBGMに和紙貼りをされました。作業が終わるころ、会長さんが現れ行灯を倉庫に吊り下げて保管してくださいました。いろんな方が繋がり集まって支えられて準備が着々と進んでいます。(記者 高橋)



7 住人十色での行灯制作

11月23日午後 7月毎の行灯制作中の住人十色(株)木下工務店に伺いました。制作をするきっかけは、1月行灯制作の須田さんのつながりの大からのお声掛けで始まり毎年「7(月)」を制作され今年で3年目のことでした。この日は、制作スタートの日で、竹組みを手際よく進めていってしまっていました。今年の「7」は来年の干支の龍をモチーフにしています。木下社長は龍の顔を、尾を今年の「とよみのよぶね」制作リーダーの羽根田さんが、胴体を総理士の増田先生が作りそれぞれのパーツを繋ぎました。女性陣は、船首と船尾につける行灯の枠組みと和紙貼りをテキパキかつ丁寧に進められました。さすがに慣れた大人7人のパワーはスゴイ、一日で竹組みはほぼ完成しました。11月26日、12月3日には、お容赦やご家族、知人も加わり、和紙貼りや色付けをされる予定です。12月22日どんな行灯ができてあがっているのか早く楽しみます。(記者 高橋)

